

太山融齋作・
白雲山の漢詩二首

淡路博和

冊簡一三三号に、板倉勝明侯の「白雲山記」の意識を載せて頂きました。今回は安中藩の儒者太山融齋が、白雲山を詠った漢詩二首をご紹介します。融齋の書体は独特で解読は甚だ難しいのです。後述の篠原博先生のご指導を仰ぎ解読してみました。なお、読み仮名は現代仮名遣いで付けました。二首とも今のところ作詩年月不詳です。

(その一)

(読み)

白雲山霽山雲白	白雲山霽れて山雲白く
穉樹紅凋葉盡碧	穉の樹の紅は凋葉し碧り盡まる
石激水流急漲溪	石激る水流急にして溪に漲り
昔猶今日今猶昔	昔猶今日のごとく今猶昔のごとし
登白雲山回文	白雲山に登りて回文す
融齋老人誠	融齋老人誠

注意して読んでいただくと判りますが、この漢詩の形態は、第一句と第四句が、上から見ても下から見ても、文字の並び方が全く同じです。したがって、上から読み下だしても、下から読み返しても同じですし、平仄と韻も同じになっています。こういう漢詩を回文詩と言うそうです。

そこで試みに、右の漢詩の各句の文字をすべて逆さに記してみたのが左の漢詩です。

(その一の回文)

(読み)

白雲山霽山雲白	白雲山霽れて山雲白く
碧盡葉凋紅樹穉	碧りは盡まり葉凋む紅樹の穉
溪漲急流水激石	溪は急流漲り水は石に激し
昔猶今日今猶昔	昔猶今日の如く今猶昔の如し

(その二)

次の漢詩は、妙義町の某家の奥座敷に掲げられていたものです。ご主人のお話では「今まで大学の先生ですら読めなかった」ということでしたので、それは是非見せてください、ということで奥座敷に入れていただきました。

その書を見た瞬間、私は、これは太山融齋の書であることを直感いたしました。ただ、解読はとても手におえないので写真に撮り、帰宅後、私の恩師篠原 博先生に見ていただきました。先生は漢文と歴史に造詣が深く、ご自分でも漢詩を作り、母校東京大学での漢詩合評会に出席されておりましたが、昨年（二〇〇五年）正月、八十九歳で天に召されました。

この難解な書を先生は即座に解読されて、その意味まで教えていただきました。後に、この漢詩と解読文は請われて「妙義町誌」に載り、初めて世に出たわけであります。

篠原先生のご指導に感謝しつつ、この機会に冊簡に紹介させていただきます。

（漢詩部分の読み）

道德一心通上天	道德一心 上天に通じ
濃雲四起正油然	濃雲 <small>に</small> 起つ 正 <small>に</small> 油然 <small>もつぜん</small>
嚇突神靈感誠敬	嚇 <small>かく</small> 突 <small>うま</small> たる神靈 誠敬 <small>せいけい</small> に感じ
滂沱大雨溢乾田	滂沱 <small>ほうた</small> たる大雨 乾田 <small>かんてん</small> に溢る。

白雲山守亮道師者生

其氣象出凡勤行最正焉今

茲自春中至季夏歲大旱

禾稻將枯農民愁苦不忍見也

一日 六月十六日也

登山巔祈雨於奥院

功驗太著沛然流車軸

謳歌之聲偏乎山野矣余

亦欣然有感而賦此詩云

五明城裏老学融齋誠

（説明部分の読み）

白雲山の守亮しゅりやう道師は生れつき

その氣象は凡ぼんを出て勤行最ちんぎょうも正し。

今茲、春中より季夏に至る歳 矢草
禾 稻將に枯んとし農民の愁苦見るに忍びざる也
一日、六月十六日なり。
山 巔に登り雨を奥院に祈れば
功験太に著れ、沛然車軸を流す。
謳歌の聲山野に徧く、余
また欣然感有り、而してこの詩を賦すと云ふ。
五 明城 裏 老学融齋誠

(大意)

白雲山の守亮 道師は非凡な氣象の持ち主で、勤行も正しく勤めていました。ところが、今年は春から夏季に至るまで、大旱魃で、稲は將に枯れんとして、農民の愁いと苦しみは見るにしのびがたいものでした。

そこで、六月十六日、道師は山の? に登り、奥院で降雨を祈りました。するとその靈験は大いに著われ、車の軸を流すほどの勢いで雨が降ってきました。喜び歌う声は山野に溢れました。私もまた嬉しく感じ、この詩を賦した次第です。

五明城(安中城の雅称)裏にて 老学融齋誠